



総経理のための

超 会計入門

第2回

複式簿記と仕訳

会計の原点に戻って

「複式簿記は、商売をするうえで実に広い視野を与えてくれる」。これは、かの文豪ゲーテがその代表作で語らせた台詞の一節です。複雑で多数の商取引を、簿記を通じて整理することで、細かなことに煩わされることなく、経営の全体を把握できるようになることを言っています。

一般的に、「会計」の重要性は認識できても、その会計の原点ともいうべき「簿記」については軽視されがちです。そこで今回は、簿記の根幹である「仕訳」について解説します。

仕訳はキャッチボール

仕訳というと、借方/貸方 (debit/credit) に勘定科目と金額を入れるだけですが、これが、すぐに右と左が混乱して簿記が嫌になる最初の壁になります。ここでは理論を捨てて体で理解していきましょう。

まず、ご自身がキャッチボールをしている姿をイメージしてください (右利き前提)。左手にグローブをはめて右手でボールを投げていますよね。次に、ボールを現金などの「資産」に置き換えます。現金(資産)を受け取る際にはグローブをした左手

(左側=借方)、相手に渡すときには右手(右側=貸方)ですね。これで準備OKです。実際に仕訳をしていきましょう。

① タクシー代で千円使った。

現金を投げる(渡す)のは右手なので、右側に「現金」勘定として千円。反対側(ここでは左側)には、その理由や原因を記入します。ここでは「交通費」などでOKです。

② 銀行から十万円借りて口座に入金された。

銀行からお金を受け取ったので、左側に記入。この場合は現金でなく、銀行口座に入っているの、「預金」勘定。その反対側(理由や原因)は、銀行からの借入金ですね。

③ 一万円の商品を現金と売掛金の半々で売上げた。

現金と売掛金(資産の一種)を受け取っているの、それぞれ五千円ずつで左側に記入。その理由である反対側には、商品売上一万円がはいります。なお、左側(借方)と右側(貸方)の合計額は、必ずバランスさせます。

簿記は人類最高の発明品!?

これだけで簿記の初歩はマスターできました。この一つ一つの仕訳を集約した結果

が、貸借対照表であり、損益計算書になります。ですから、貸借対照表の左側に「現金」や「売掛金」があり、右側に、「借入金」があるのも、頷けますね。

ゲーテは、最初の言葉に続けています。「複式簿記は、人間の精神が産んだ最高の発明の一つである。立派な経営者になるには、複式簿記を学ぶべきだ」と。



左側 (借方)



右側 (貸方)

勘定科目	金額	勘定科目	金額
① タクシー代で千円使った			
交通費	1,000	現金	1,000
② 銀行から十万円借りて口座に入金された			
預金	100,000	借入金	100,000
③ 一万円の商品を現金と売掛金半々で売上げた			
現金	5,000	売上	10,000
売掛金	5,000		

単位：日本円



斉藤 孝史
Nac-Mytsコンサルティングチーム
東京大学経済学部卒、東大大学院(会計学専攻)修了後、大手電機メーカー経理部を経て現職。国際会計基準、原価計算等に関する論文多数。

監修：中小田聖一(なかおだせいいち)
NACグループ代表、Minato CPA Ltd.共同創業者、日本国公認会計士。